

秋期福音特別集会(2)(京都)

贖罪者たる「エホバの僕」

——イザヤ書第52章13節～53章——

1982年11月28日

小池辰雄

わがしもべ 彼の眼で見る アナテマ魂 往還一如 どん底のひと 無即無限無量者 キリス
トの定力具身 僕の貌 永遠の贖罪 われらに平安をあたう エク・クリストウ 祈り

【イザヤ52】

13 視よ、わがしもべ智慧をもておこなわん。上がりのぼりて甚だたかくな
らん。14 さきにはおおくの人かれを見ておどろきたり（その面貌はそこなわれて
人と異なり、その形容はおとろえて人の子のことなれり）15 後には彼おおくの国民
にそそがん。王たち彼によりて口をつぐまん。そはかれら未だつたえられざ
ることを見、いまだ聞かざることを悟るべければなり。

【イザヤ53】

1 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわ
れしや。2 かれは主のまえに芽えのごとく、^{かわ}燥きたる土よりいづる樹株のご
とくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、
われらがしたうべき艶色なし。3 かれは侮られて人にすてられ、^{かなしみ}悲哀の人に
して病患をしれり。また面をおおいて^{さく}避ることをせらるる者のごとく侮られ
たり。われらも彼をとくとまざりき。

4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわ
れら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの
愆のために^{きずつ}傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけて
われらに平安をあとう。そのうたれし^{きず}痕によりてわれらは癒されたり。6 わ
れらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバ
はわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、^{ほふりば}屠場にひかる
羔羊の如く、毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざり
き。8 かれは虐待と審判によりて取り去られたり。その代の人のうち誰か
彼が活けるものの地より^た絶れしことを思いたりしや。彼は民の^たがの為にう
たれしなり。9 その墓はあしき者とともに設けられたれど、死ぬときは富め



るものともになれり。かれは暴をおこなわず、その口にも虚偽なかりき。
10 されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり。斯
てかれの靈魂^{たましひ}とがの献物^{そなえもの}をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永か
らん。かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて榮ゆべし。11 かれは己が
たましひの煩勞^{いたずき}をみて心たらわん。わが義^{ただ}しき僕はその知識によりておおく
の人を義とし、又かれらの不義をおわん。12 このゆえに我かれをして大いな
るものとともに物をわかし取らしめん。かれは強きものとともに掠物^{えもの}をわか
ちとるべし。彼はおのが靈魂^{たましひ}をかたぶけて死にいたらしめ、愆^{とが}あるものにと
もに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい、愆あるものの為にと
りなしをなせり。

● わがしもべ

イザヤ書 52 章 13 節から入ります。これは序曲みたいなところですよ。

13 視よ、わがしもべ智慧をもておこなわん。上がりのぼりて甚だたかくな
らん。

これは神さまの言葉です。ヘブライ語で「ヒンネー」(視よ)と一番先にでてくる。「智慧
をもておこなわん」は

「智慧をもて榮えん」

と読んだ方がいいと思います。「上がりのぼりて甚だたかくならん」とは

「栄光を着る」

ということですよ。

14 さきにはおおくの人

イスラエルの多くの人です。

かれを見て

というのは原語では「汝を見て」です。汝というのは無名の預言者、第二イザヤのことです。

おどろきたり (おどろきたること)、

「汝を見て驚いたように、もう一人のエホバの僕を」

第二イザヤに向かって神さまが仰つて、

「お前を見て驚いたように、今度は彼を」

と、こうくるわけです。「驚く」とは驚異驚嘆すること。

「お前そのものも大変なものだが、けれども、お前が伝えようとしているところの、
私が言おうとしているところの、このエホバの僕は」

ということになってくる。

(その面貌^{おもすけ}はそこなわれて人と異なり、その形容^{かたち}はおとろえて人の子とこと



なれり)

普通の人とちがうと。「人の子」という言葉は、別な意味で、ダニエル書あたりではキリストを預言した言葉になりますが、これはそうではない。

¹⁵ 後には彼おおくの国民にそそがん(驚かさん)。

「彼」というのは、知られざるエホバの僕です。これは大変な驚きとなる。あるいはこれは「そそがん」とも訳してありますけれども、「血をそそがん」という気持で読むとすると、第三イザヤの 63 章 3 節を思わせるようなことになります。

王たち彼のゆえに口をつぐまん。

もう何も言えなくなると。

そはかれら未だつたえられざることを見、いまだ聞かざることを悟るべければなり。

彼らに限らず、我々がそうです。非常に高くのぼった彼はどん底に落ちた。地獄的な現実に落ちた。ブレイクが

「天国と地獄の接吻」

という絵を描いたけれども、正に地獄に落ちた。それが故に高く天にのぼられた。このことはローマ書の中にも出てきます。未だかつて聞かざるところのもの、伝えられざるもの、未だかつて見ざるところのもの、そういう人物です。

●彼の眼で見る

見るということはどういうことか。これはやはりユダヤのあるラビの詩ですが、

「私の愛するものが

我々にとってはキリストです、

現れたときには、どの眼でもって私は彼を見ようか。私の眼ではない彼の眼で見るのだ。

なぜなら、彼自身の他には誰も彼を見ることがないから。」

とある。私はこの言葉には参った。

「福音書に現れているキリストを自分の眼で見たり、自分の耳で聞いたり、自分の頭で判断したりしたら、絶対にダメだ」

ということ。次元が違う。キリストは UFO 的な宇宙人だから。自分の眼はダメだから、彼の眼をいただいて見るよりか仕方がない。「彼の眼で」ということは、

「彼の眼の中に自分を入れてしまつて」

ということです。陽の光は陽の光で見る。詩篇の、

「そはいのちの泉はなんじにあり、われらはなんじの光によりて光をみん。」(詩篇 33・9)

がこれに類似している。我々はこういったものを見ているが、眼で見ているのではない。



眼にくるところの陽の光でみている。彼の眼でもつて見る。彼になりきらなければ見れないということ。生まれつきの我々は、誰も彼を生まで見れない。

「お前たちは一遍死ななければ、私の言う事やした事が分からんぞ。死んで、聖霊がくれば、今までしたり言った事が全部分かるから」

と、ペテロにちゃんと言っている。弟子たちはしょっちゅうキリストを見てたんだ。キリストにも触っていた。握手もしていたでしょう。だけれども、これがダメなんだ。聖霊がやってきて、彼の眼となり彼の耳とならなければダメなんだ。ところが、今のクリスチャンがそこにきていない。

「聖霊なきものはキリスト者にあらず」

とパウロは断言している。

この詩の言葉は我々にとっては正に然りアーメンなんです。彼自身となりきらなければ見れない。結局、一如の世界に入らないことには、「信仰」なんて言ったって、それはダメなんです。すべて現実です、もつとも素晴らしい現実です。花を見るのも、外から見るのではダメです。花の中に入らなければ花は見えない、その声の中に入らなければその声は聞こえないということです。だから、

「未だ見ず、未だ聞かざること」

と書いてある。イザヤ書の他の所にも二、三回そういう言い方が出ていますが、正にその通りです。

●アナテマ魂

それでは今度はイザヤ書53章にはいります。53章は預言者の言葉です。

「われらが宣^{のふ}るところを

とは直訳すると、「聞いたところ、聞かされたところ」ということです。

信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。²かれは主のまえに芽^{めば}えのごとく、燥^{かわ}きたる土よりいづる樹株^{こかぶ}のごとくそだちたり。

新しき生命の状態を「芽えのごとく、樹株のごとく」と言う。切り株からグーツと芽がでてくる。彼には、

われらが見るべきうるわしき容^{すがた}なく、うつくしき貌^{かたち}はなく、われらがしたうべき艶色^{みづえ}なし。³かれは侮^{あなど}られて人にすてられ、悲哀^{かなしみ}の人にして病患^{やまい}をしれり。

「なやみ」というのは病氣ばかりではない。仏教の言葉で、悩み苦しみを苦患^{くげん}という。

また面^{かお}をおおいて避^{さく}ることをせらるる者のごとく侮^{あなど}られたり。われらも彼を

とうとまざりき。

まあ、大変なことです。ダビデはメシヤの代表として——キリストの系譜に「アブラハムの子、ダビデの子」とある——ミケランジェロの造った像をみても、堂々たるものだけ



ども、

白隠が自分の住まいを「せんだいくつ闡提窟」と呼んでいた。「闡提」というのは、どうにもならない、救い難き縁なき衆生みたいな度し難いもの、箸にも棒にもかからないもの、という意味をもっているそうです。

「私はそういう者を相手に禅をやっている。それと兄弟なんだ」

という気持がこの白隠にある。自分が高い所にいたのでは、本当に衆生を済度することができない。白隠はどん底に坐っていたところの坊さんである。「汚らしい」なんてことは言わない。パリサイになると、すぐ

「潔いの、潔からざるの」

とやる。泥の中から蓮の花が咲いてくる。キリストはもちろんそうであった。

己を高くしてエラク威張っていたところの自己義認者、パリサイの権化のパウロがキリストにひっくり返されて、彼がやはりどん底になりました。

「我は罪びとの首なり」かしら

という。それで、ローマ書9章の始めの方に、

「たとえキリストに棄てられても兄弟たちのためには」

とあるが、あれがパウロの悲願であった。

「私みたいなやつが救われたのだから、ユダヤ人はみな救われなくてはいかん」

と。内村先生がそういった気持をもっていました。戦場ヶ原の会話のあの一文は私は大好きです。

「自分が救われたんだから、万人は救済されるんだ」

という。白隠はやはりそのアナテマ魂であった。良寛さんもそうです。本当の超一流の坊さんはみなどん底に立っている。だから凄い。どん底に立たなかったら、しんがりにならなかったら、ダメです。正に僕なんです。フレドリック大王がなぜ素晴らしい王様であつたかというと、

「私は国家の第一の僕である」

と言った。棄身です。そういう在り方が本当のひとです。

●往還一如

鈴木大拙に、

「極楽という所は行つたらすぐ帰ってくる所だ」

という言葉がある。帰ってきて地獄のようなこの娑婆で衆生のために働くのが本当の仏教だというわけです。これは還相げんそうという。還相廻向えんそうということです。天界に往くことは往相という。往生するというでしょ。往きて生きる。

我々は天界に、天国に行つたら、これが



「エン・クリスト」(キリストの中に)

なんだ。「エン・クリスト」は往相の天国界です。「エン・クリスト」は山の中にこもってはダメだ。これは還相する。即ち、娑婆の中にいて、つまらない所をつまらなくはなくしてしまふ。これが即ち、往相界を極樂にしてしまふ。だから、往還一如の世界なんです。本当に「往」をしてなければ「還」が成り立たない。聖霊の人は、本当の如來の靈をもらっている坊さんは、往還一如、天国地獄一如の在り方ができるわけです。分け隔てなんかしている差別の世界ではない。

ヨーロッパ的思惟というのはずぐ

「テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ」(正・反・合)

なんていう論理的構造になるから、ヨーロッパ人にはそれがなかなか分からない。しかし、プロティノスやエックハルトというあの辺の神秘家はその世界に入っています。

白隠の師の正受老人が彼に、

「お前は本当の弟子を一個半つくれ」

と言った。もうたくさんは要らん、多すぎると。その気合は、

「本ものだけを問題にしろ、いい加減なことではダメだ」

ということです。数を問題にしない。あなた方は多かろうが、私に言わせると、あなた方は一人なんです。私は一人ひとりに語っている。一即多、多即一の世界です。真理はそういう気合のもとにある。

「二個半」

でいい。これがもの凄い波をもっている。宗教改革者マルチン・ルターは一人だ。それでひっくり返してしまった。あなた方一人があなた方の環境の人たちをひっくり返してしまふ。生涯かかって一人もひっくり返さなかったように見えても、向こう側に行ったあとで、

「やはりあれは本ものだった。私たちは間違っていた」

ということになる。

そういう生き方をしていないとダメです。それは何でもいい。皆さんがやっているところにおいて、その存在そのものを通して、仕事そのものを通して本当にキリストの栄光を、言わず語らずのうちに現象していただくさい。結果は何も考えなくていい。結果は神さまがいいようになさる。問題は在り方そのものです。とにかく、伝道意欲を燃やしていただかないと。燃えて、人を燃やさなくては。皆さん一人ひとりみな天下一品ですから、どうぞ、そのおつもりでやってください。

●どん底のひとつ

パウロが正に罪びとの首としてどん底に立って、あの伝道をした。第二イザヤは自分も神さまに非常にどん底に立たされたんだが、しかし、第二イザヤは不思議な、また桁ちが



いなひとを預言させられた。全くこれは上からの示しです。自分の在り方の相対性をもうひとつ突き抜けたところの絶対的などん底のひとのことをこの53章で言わせられている。

4 まことに彼はわれらの病患やまいをおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。

悩み苦しみは、精神的なものもまた肉体的なものもどちらももちろん入ります。また、運命的なものの環境的なもの、何でもすべて我々がつくわすところの、そういった悩み苦しみがあります。ヨブが苦しめられたときに、

「ヨブはしようがないやつだから、神さまにやつつけられているんだ」

なんて友から言われた。ところが、実はそうではなかった。

5 彼はわれらの愆とがのために傷きずつけられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰こらしめをうけてわれらに平安やすきをあとう。そのうたれし瘡きずによりてわれらは癒されたり。

53章5節というのは極みの言葉です。もう解説するまでもない。正にキリストの受苦——苦は十字架のこと——十字架の贖罪の預言です。

私たちの存在そのものが完全に贖われなければ、我々はどうにもならない存在です。我々の罪ではない。罪の我々、罪なる我々そのものが、一人ひとりが完全に贖いとられることをこれほどはつきりと預言されているとは驚くべきことです。旧約に全く驚くべき事態とは——何に驚くかという——この事態です。この人の事態です。これを受けないで、どこへ行けるんですか。また、これを受けるといふなら、本当に全存在で受けとらないとダメです。過去も現在も未来もない。全存在がそのように贖われきってしまった。それはこちら側の信仰だとか、行為だとか、そんなもののいかに絶対に係わりない。

キリストが

「信仰うすきものよ」

なんて仰るものだから、信仰をサムシング（何ものか）にして

「信仰を厚くしなくてはいいかん」

なんて思う。このキリストの言葉に躓いてはいかん。信仰はゼロか無限大かのどちらかだ。相対的に在るものは無いと同じです。けれども、本当に信すら無いというところに徹底的にこなければダメなんだ。我々はこちら側からは信じ得ない。

これは親鸞の信仰がそうだ。信も賜りたる信である。弥陀の本願の御もよおしによる。我々は信ずることすらもできない者だ。信じたと思つたら、それは自己中心の信仰だった、御利益だったと。人間というのはいかにそういうことです。

だから、もう徹底的な無なんです。その徹底的な無を、それでは悟つてやろうというのが禅宗なんだけれども、悟る必要はない。

「私とその徹底的な無を十字架で与えているではないか」



という事実がキリストの十字架なんです。

これは言葉ではない。

「十字架の言」

とパウロが言ったのは、十字架という活けるもの凄い事実だということです。

「初めに言あり」ことは

のあの「言」はヘブライ語で「ダーバール」という。これは「道」という意味です。日本語ではむしろ「道」と言った方がいいくらいです。

徹底的に、

「自分は何者でもない、こんなものはもはや問題でない」

と言って投げかけていたのは、生まの現実でその無の中にいたのはナザレのイエスだけです。この無を私たちは賜ったわけです。

●無即無限無量者

私たちはそのような火の玉となって、今は道を伝えなければならぬわけです。いわゆるクリスチャンはダメなんだ。だから、

「新宗教改革」

と私は言っている。なにも威張って言っているのではない。一人ひとりがもう、かくせざるを得ないところに来ているということです。

この無をキリストは徹底的に実証なさったから、この無は即無限無量ということになって、神さまの中に入ってしまったている。だから、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書に現れているあのもの凄い現実が展開しているわけです。

「イエス・キリスト、無即無限無量者」

ということですよ。

それは燃やされる、光らされる、活かされる。無限無量の世界はみな上からくる。こんな簡単なことはない。信仰なんでものは何と簡単なんだ。こんな簡単なことをなぜ複雑にしているか。その消息を一番語っているのはヨハネ伝の14章から17章です。

とにかく、このイザヤ書53章には本当に参ります。これは、皆さんは読んで、言葉の奥の現実に関心を深く祈り入れることです。即の世界、ここに於いて今直ちという世界だから。

「今」

という世界です。毎日の生活の中でこれにハタと気がつけば、パッとその中に入れる。そして、それが段々、常燃となってくる。どんなことになっても消えない。こうなったら、もう意識の世界ではない。超一級の坊さんはそういう世界に如来の世界で入っている。



●キリストの定力具身

白隠の師の正受老人がアッシジのフランチェスコと同じようなことをやっている。こういう話がある。ある時、村で畜^かわれていた狼の子が殺された。それを親狼が怒って、村里へ出てきて、鶏をとり犬をかむ、人間の子供まで食い殺す。それを聞いた正受老人は

「よし、よし、わしが何とかしてやろう」

と言つて、その晩から狼の出そうな墓場へ行つて、坐禪を組んだ。すると、真夜中に狼が出てきて、老人の坐禪している傍へ来て、首筋や耳の根をクンクンとかぐ。もしその時に、一念でも正念相続^{しょうねん}ができなかつたら、狼にガブリとかまれてしまう。正念を相続している――獣は人間よりもそうした定力^{じようりき}には敏感である――しまいに恐れて逃げていく。そういうことを何度かやっているうちに、ついに狼が出なくなつたという。

「正念相続」

とは、不断に正念の世界に在るということです。「正念」とは、弥陀の仏道の第一義の世界に自分を入れていくことです。即ち、聖霊の常住の世界が「正念相続」にあたる。一如の世界に入っている。この相続が切れたら、狼に食われる。動物というのは、言葉や概念の世界でないことには非常に敏感なんです、言葉以上の世界です。正念相続という坐禪をくんでいたの、とうとう狼の方が負けて逃げて行つて、それからもう狼は来なくなつたという。これを

「定力具身^{じようりきぐしん}」

という。定まりたる力を身に具^{そな}えていることです。私たちはキリストの「定力具身」にならないとね。

私たちは、キリストの霊では一切のものを包括してまたこれを消化してしまう。なにも仏教と混ぜているわけではない。素晴らしいものには、私は無条件に敬意を表します。こっちは何もないんだから。

アッシジのフランチェスコは、村に狼が出て人が食われて困るというので、狼の所へ出かけていつて言うには、

「狼さん、ここに來てこれを食べてくれ。毎日、私は食物をもつてくるから、人を食べたらいかんよ」

と。とうとう狼は、フランチェスコの言葉は言葉としては分からないけれども、彼のその深い愛にうたれて、それから全然、人を害さなくなつたという。

だから、愛は最大の力をもっている。天来の愛は最大の力をもっています。

「わが扶^{たす}くるわが僕わが心よろこぶわが撰^{えら}び人を見よ。我わが靈^{みたま}をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。かれは叫ぶことなく声をあげることなくその声を街頭^{ちまた}にきこえしめず。また傷める蘆^{あし}をおることなく、ほのくらしき燈火^{ともしび}をけすことなく、真理^{まこと}をもて道をしめさん。」(イザヤ42・1～3)



という、優しい愛、また深い愛です。愛することが本当の意味において道を伝えることです。

● 僕の貌

ピリピ書2章に、

「⁵ 汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。

同じ心に、同心となれと。キリストの心とはどういう心かというと、

⁶ 即ち彼は神の貌^{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、

⁷ 反つて己を空しうし僕の貌^{かたち}をとりて人の如くなれり。⁸ 既に人の状^{さま}にて現れ、

受肉し、

己^{ひく}を卑^{ひく}うして

徹底的などん底に立つて、

死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。⁹ この故に神は彼を高く

上げて、之に諸般^{もろもろ}の名にまさる名を賜いたり。¹⁰ これ天に在るもの、地にあ

るもの、地の下にあるもの、悉^{ことごと}くイエスの名によりて膝を屈め、¹¹ 且もろ

もろの舌の『イエス・キリストは主なり』¹² と言いあらわして、栄光を父なる

神に帰せん為なり。」(ピリピ2:5～11)

これは大変なところだ。「己を空しうし」とは、「ケノーシス」という字ですが、己を本当に空しうして、もう全然自分が無いんだ。内村先生もこの言葉が好きだった。全く自分を神さまの前に何者ともしない、その空しさはいわゆる虚ではない。もし言うなら、この空しさは「大虚^{たいこ}」なんです。空とか無とかいう消息は絶対にニヒリズムではない。絶望的なあのニヒリズムとは違う。言葉が似ているけれども間違わないようにしてください。

空気は誰も見えない。空気は空しい。正に空^{くう}の気だ。「空気」とは素晴らしい言葉だ。空でありながら、見えないけれども、これはもの凄い気なんだ。我々の肉体はこの気を吸って生きているんだから。ところが、霊界では霊気^{れいき}というのがある。霊気を吸って生きている。本当に霊気を吸って生ぎると、もうこの四次元から抜けた五次元的な世界になってしまう。音波、電波、磁波、光波、それから霊波の世界です。こんなことを私が言うのは、聖霊が来ているから言えるんですよ。でなければ、こんなことを言ったってしょうがない。この霊波の世界に入って、私たちは霊気を吸っている。だから、

「内なる生命は日々に新たなり」

とパウロが言った。そういう霊気の世界です。空気を吸いながら、同時に、霊気を吸っている境地に入る。そうすると、何かしらんけれども、楽でしょうがない。

「己を空しうし僕の貌^{かたち}をとりて人の如くなれり」

とある。神さまの前に本当に己を空しうし、神さまに絶対信頼、絶対服従です。神一切です。「僕^{しもべ}」¹³ というと、なにか自由がないと思うけれども、冗談じゃない。最大の自由の世界です。



僕となって自分が空っぽになって、神の意思が、天意が、神意が自在に動きだすと、これは力と光と生命をもつていますから、「自由」なんていう言葉が表すことができない素晴らしい現実に入ってしまったっているわけです。

この無は

「賜りたる無」

だから、賜りたる自由自在な世界にはいる。往くとしてかなわざるはなしという。絶対に行き詰まらない。行き詰まったと思ったところにももの凄く光る。そうしたら、それで相手は参ってしまふ。だから、よく祈りこんでください。祈り込むとは、ただ文句を並べて長く祈れということではない。自分そのものをグーッとキリストの中に投げ入れることです。

●永遠の贖罪

このピリピ書2章は正にイザヤ書53章にピタリ応ずるところです。ピリピ書にははつきりと

「十字架の死に至るまで」

と書いてありますが、イザヤは預言させられながら、彼自身は十字架のことは知らなかったでしょう。けれども、それと同じ事態のことを預言しているわけです。

十字架は正に「代罰」、罰の代わりである。我々は罪びとである。即ち我々は自己中心で我執にとらわれている。義は罪を審くから、その罪びとを審く。即ち、

「罪の価は死なり」

という。

「その死をみんな自分は引き受けた」

というのがこの贖罪なんだ。だから、罪は全部ここでもって罰せられ終わった。「ただ一回」とヘブル書に書いてあるとおりです。

ヘブル書というのは、祭儀的なユダヤ人に徹底的に語っているところで、旧約聖書を止揚してしまうのはこのヘブル書なんです。ヘブル書9章は大事なところですよ。

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大いなる全き幕屋を経て、

霊的な幕屋を経て、

山羊こやしと犢こやしとの血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架に入って、

永遠の贖罪あがないを終えたまえり。

私たちはもう「永遠の贖罪」をいただいて、贖いの完了の世界に入っている。

もし山羊および牡牛おの血、牝牛めの灰などを穢けがれし者にそそぎて其の肉体を潔きずむることを得ば、まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしき



リストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。

ここに「永遠の御霊」という言葉がでている。

この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん為なり。……キリストは真のものに象れる、手にて造りたる聖所に入らず、真の天に入りて今より我等のために神の前にあらわれ給う。これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入るごとく、しばしばおのれを献ぐる為にあらず。もし然らずば世の創より以来しばしば苦難を受け給うべきなり。然れど今、世の季にいたり、己を犠牲となして罪を除かんために一たび現れたまえり。一たび死ぬることと死にてのち審判を受けることとの人に定まりたる如く、キリストも亦おおくの人の罪を負わんが為に一たび献げられ、復罪を負うことなく、己を待ち望む者に再び現れて救いを得させ給うべし。」(ヘブル 9・11～28)

救いを完成するわけです。最大の人です。

日本の気候風土からいうと、日本人は仏教の方がなんとなくあうんだよね。聖書は沙漠の宗教、荒野の宗教だから。けれども、これを本当に受けとると、なんとなくよりかもつとはつきりと東洋的なものの良さというものを活かすことができる。

『エン・クリスト』12号(1982年12月臨時特輯号)に私は、

「廓然無聖、廓然とは廣大無辺なこと。本当の宗教は相対的な区別をしない。であるから無聖はまた無俗をも示唆する。宗教的根源存在は、無私、超観念、無限、万象包摂といったところにその本質がある。

万象包摂ですから、万理帰一あるいは万法帰一せしめるところの力をもっているのはこの福音です。

イエスも言った、「おまえは何で私を善いなどと言つか。神ひとりの他に善いものはない」と。イエスの根源意識は「無」善に根をおろしていた。イエスのこの「無」に神の「全」がそのまま入って来た。だからキリストは「我を見し者は父を見しなり」とか、「我と父とは一如なり」と道つことができた。

それゆえ、肉なるイエスは無者であり、霊なるキリストは無限無量者である。それで私はイエス・キリストを無即無限無量者と呼びまっする。合掌。」

と、短い文章ですが、私は烈々と書いた。

●われらに平安をあたう

イザヤ書53章にもどります。



5 彼はわれらの愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあとう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒されたり。

ここに「平安」とある。ヘブライ語で「シャローム」という。士師記 6 章に、

「エホバの使^{つかい}、手にもてる杖の末端を出して肉と無酵^{たねいれぬ}パンに触れたりしかば、巖^{いわ}より火燃えあがり肉と無酵パンを焼き尽くせり。かくてエホバの使、去りてその目に見えずなりぬ。ギデオン是において彼がエホバの使者なりしを覚り、ギデオンいいけるは、ああ神エホバよ我面^{かお}を合わせてエホバの使者を見ればはた如何せん。エホバ之にいいたまいいけるは、心安かれ怖る^{なか}る勿れ、汝死ぬることあらじ。

「心安かれ怖るる勿れ」という言葉は、キリストが波の上で言われた。ガリラヤ湖で弟子たちの乗った舟が大波でひっくり返りそうになった時に、水の上を宇宙人みたいに渡ってきた。弟子たちは幽霊かと思つたら、

「心安かれ、我なり、懼るな」

と言われたのがこれです。

ここにおいてギデオン^{かしこ}彼所にエホバのために祭壇を築き之をエホバシャロームと名づけた。」「(士師記 6・21、24)

「エホバシャローム(平安の神)と名づけた。平安を与える神です。ヘブライ人は、「こんにちは」も「さようなら」もみな「シャローム」と言う。

「シャローム・レカー」「平安があなたに在るように」

ということです。平安はただ穏やかではない、これは力をもっている。力がなければ平安はない。神さまの力が入ってくるから、安らかである。やせ我慢して安らかなのではない。御霊がこなければ、本当の平安はない。だから、

「われらに平安をあたう」

というこの預言の中に、既に聖霊の世界が示されている。聖霊がなければ本当の平安でないということ。十字架の贖罪を本当に受けとれば、聖霊がくる。聖霊が来たら力がくる。これが本当の平安の世界です。

6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまへり。

われらの不義でも罪でも何でもいい、みなすつかり置いてしまったという。まあ驚くべき預言ですね。私はここを読んでいて、どうしてこんな預言が出てきたかと思つて、参つてしまった。第二イザヤやエレミヤは、そのひとつの前哨的なサンプルでありましょう。けれども、ここに預言されているエホバの僕にはエレミヤも第二イザヤもかなわない。これを書かせられた第二イザヤ自身は、本当に入神状態で書かせられたでしょうね。本当にエ



ホバの口に、エホバの筆になったわけです、「筆端雲霧漂う」ということに。

7 彼はくるしめられるれどもみずから謙^{へりく}だりて口をひらかず、

キリストがそうでしたね。ある時は、バツと言われましたけれども。

屠場^{ほふりば}にひかるる羔羊^{こひつじ}の如く、毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。

イザヤ書53章を身でもって読んだキリストは、その通り彼は実行された。「あれは私のことを言っているのだ」と。

8 かれは虐待^{しいたげ}と審判^{さばぎ}によりて取り去られたり。その代の人のうち誰か彼が活けるものの地より絶^たれしことを思いたりしや。彼は民の^たたがの為にうたれしなり。

これが消えたのは誰もしらん。いわゆる野垂れ死にでしょう。

9 その墓はあしき者とともに設けられたれど、死ぬときは富めるもの^{あらび}のとなり。かれは暴^{あら}をおこなわず、その口にも虚偽^{いつわり}なかりき。

10 されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり。

と凄^{しみ}いことが書いてある。救の為にです。この「砕く」という字は二度でてますが、この言葉は滅多に出てこない。木っ端微塵にすることです。私はここから

「砕けの神学」

ということを言いだした。砕けから突破にきて包摂にくる。

●エウ・クリストウ

斯てかれの靈魂^{たましひ}とがの献物^{そなえもの}をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん。

ここらはちよつと原文がいろいろおかしくて、読みにくいところですよ。

かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。11 かれは己がたましひの煩^{いたずき}勞をみて心たらわん。わが義^{ただ}しき僕はその知識によりておおくの人を義とし、又かれらの不義をおわん。

「その知識によりて」という訳は困る。これは「知識」ではない。靈知^{れいきち}、「エピグノーシス」なんです。あるいは真知^{しんち}または愛知^{あいち}です。愛知とは愛することと知ることが一つという、愛知^{あいち}一如^{いちに}の愛知ということですよ。「フィロソフィア」の「知を愛する」とはちよつと違う。

「知によつて多くの人を義とする」

という。「知によつて」とは、神さまの愛を本当に身に受けている人だから、それを知という。その知は即ち、己を棄てる十字架の知なんです。

「お前は^おこの十字架を負つて、人のために罪の贖^{あがな}いをしろ」

という、その神の贖^{あがな}いの愛の、救済の愛の内容が、この「知」の内容なんです。これが「知



によって」ということ。神さまの心を知ることによって、人を義とした。神の意を知ることが直ちに実存に出ている。

ソクラテスが

「知行一致」

ということを言った。知らざることが一番のまちがいだ、本当に知れば必ずそれは行ずるんだと。こうなると、知行も信行もみな同じです。信行一致という。知ることも信ずることもみな本当は同じなんだ。だから、いわゆる分析的な判断がいかに真理から遠ざかるかということがわかる。神の意を知りしがゆえに、知そのものとなってしまうた。これは知人なんだ。絶学の学の世界です。

¹²このゆえに我かれをして大いなるものとともに物をわかし取らしめん。かれは強きものとともに掠物をわかしとるべし。彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆あるものとともに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい、愆あるものの為にとりなしをなせり。

この53章はどん底の担いです。これが贖いです。どん底の担いができるためには絶対に聖霊を要します。だから、「エン・クリスト」というのは大変な言葉です。本当に

「クリストの中」(エン・クリスト)

に入ったら、

「クリストから出る」(エク・クリストウ)

出入自在になる。出るというのは、出て人に福音を現すことで、還相が出る方です。往相が入る方です。

「クリストの中へ入る」(エイス・クリストン)

と、今度は

「エン・クリスト」(クリストの中にある)

という状態になって、それから、

「エク・クリストウ」(クリストから出る)

ことになる。

● 祈り

祈ります。私たちの贖主、エホバの僕の預言の成就でありたもうところのクリストさま。驚くべきイザヤ書53章、言葉にも何もありません。ただ、一人静かに深くこれに読み入り、祈り入り、そして、血となし肉となして、53章のあなたの御意の中にいよいよこれから入っていきたく存じております。

誰にも顧みられず、誰にも理解せられず、天涯孤独、独りで十字架にかかれた主さま。しかし、あなたの十字架上の、



「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

との悲痛なる叫びは、神の義の叫びでした。それが故にあなたは十字架上で、

「彼らを赦してやってくれ。その為すところを知らず」と、どん底の愛でした。

今もなお全世界はあなたの十字架に背いています。この十字架の愛を受けそこなっている世界は、ヘタをするといふことになります。天界におけるあなたの涙とあなたの呻きとあなたの叫びと——パウロもその如くに呻きました——私たち一人ひとりが大変な歴史的な現実、使命の中に置かれております。

人にはどう思われてもいいです。あなたに本当に「そうだ」と言われて、この大事な道を歩かせてください。そして、本当の福音の証者であつたところのキリストの直弟子の使徒たち、また、知ると知らざるところにかかわらず、歴史においてそのような担いをしてきたところの人たちと、同じく同質のものに私たちはせられて、あなたの神の歴史の一端を担って進んでいきたいと存じております。

これは並々ならぬところの使命の自覚となつてきました。私たちはいよいよ己を空しくせしめられ、あなたの御霊の力をもつて、

「己が十字架を負いて我に従え」

との聖言に従つて、そこにこそ天国が現れられていくことをいよいよ感じながら、

「誰か我らに敵せんや」

とパウロが熾んに叫んだごとく、驚くべき、もう言葉にもならないこの福音の現実をいよいよ進ましめくださらんことを切に願ひ奉ります。力より力へ、光より光へと、ありがとうございます。この福音は伝えざるを得ません。

「伝えずば禍害^{わざわい}なるかな。たとえ、あなたに棄てられても」

とパウロは言いました。本当に驚くべきことです。この福音は一切のものを担いあげ、一切のものを包摂することのできる驚くべきものです。

イエス・キリストのこの十字架の、言葉ではもはや言えないところの驚くべき事態を、主さま、ありがとうございます。イザヤ書 53 章をこの兄弟姉妹たちと、このようにしてあなたから承り、祈りの中に入れられしめ、感謝いたします。

「エン・クリスト」と、あなたの中に、私たちは常燃の火となつて自在に展開していくことができますように願ひ奉ります。ただ栄光の現れることが私たちの喜び、感謝、讃美です。兄弟姉妹たちの全身の感謝と讃美と祈りとともに主イエス・キリストの御名により捧げたてまつる。アーメン。

